

件名： 被害者として

日付： 2008年05月30日

はじめまして。突然のメール失礼致します。あいりちゃんの事件以来、思い悩んでおりましたが、被害者として、自分に何ができるのか考えた末、手紙を書かせていただくことに致しました。

私は9歳の時に暴行されました。それ以来、すべてが変わってしまいました。もう3年も前のことですが、この手紙を打ちながら、今でも体が震え、息が苦しくなり、頭もくらくらしてきます。そして封じ込めていた激痛がよみがえってきます。言葉にできない痛みです。内臓がぎりぐらられるように痛み、飛び出しそうな吐き気もしてきます。助けて助けてと叫びたくなります。涙が止まらなくなります。今でも助けてほしい、この苦しみから助けてもらいたいです。つらいです。くやしいです。このお手紙も最後までかけるかどうかわかりませんが、この問題に向き合わなければ、何かしなければと思います。今まで私は暴行のニュースが流れると、テレビを消し、目を閉じ、耳をふさいできました。でも耐えられないです。あいりちゃんがかawaiiそうすぎます。何で私の後にも何度もこんなことが起きてしまうのか・・・なんでこんなことが人間にできるのかわかりません。私の苦しみは3年続いています。何度も死のうとしました。苦しみ続けるくらいなら死んで楽になりたかったです。今すぐにもでもマンションのベランダから飛び降りたい衝動に駆られます。私の記憶がなくなる限り、ずっと続くのでしょう。でも逃げてはだめ、第一歩を踏み出さなければ そんな思いで、お手紙を書かせていただくことにいたしました。

私にも 歳になる息子がいます。事件のために長い間男性とちゃんとつきあえなかった私がやっと結婚して授かった子供です。子供のためなら自分の命も惜しくないくらい大切な子供です。子供がいなければ、あいりちゃんのホームページを開く勇気もないまま、暴行のニュースから逃げたまま、人生を終わってしまったかもしれせん。

性犯罪は人間を破壊する行為です。殺人と同じです。殺人と違うのは、被害者が生きている限り、何十年でもその人間をさいなみ続けるということです。私もこの長い年月事件のフラッシュバックに苦しめられてきました。不思議なことに、激しい痛み、吐き気や震えなどの身体症状があるのに、それでもまだオブラートに包まれているような、白い霧が事件の記憶を隠し、痛みを和らげているような気がしてなりません。痛みから解放されると、手のひらに爪あとがくっきり残るくらい、こぶしを握り締めているというのに 事件の記憶も白い霧に包まれ、いくつかの断片が浮かぶだけです。「おねえちゃん、河原までどうやっていくの？」という男の言葉、押し倒された時見た最後の空の色、傍らに咲いていたカラスノエンドウの花、調書を取る時に「こんなしっかりした字を書く子がねえ」といった警官の冷ややかな声、「みんな知っているんだから、ご近所に恥ずかしい」と叫ぶ母の

声、「（弟）を見ろとittedらう。なんで一人で勝手に行くんだ」と怒る父の声、それから長い間、排尿と排便の度に激しい痛みが貫いたこと、そして景色がすっかり変わってしまったこと。その日から、まるで世界中が黒い影に覆われてしまったように、どんな青い空を見ても、いつも世界中が薄黒く、澄み切ったすがすがしさを感ずることはありませんでした。他人の冷ややかな視線を感じ、自分と友達はもう違うのだと感じ、友達の中に入っていきことができず、孤立していきました。自分はもうこの世界でひとりぼっちで、すべてが終わってしまったのだと感じました。もう笑うこともできなくなりました。事件の前、自分の前に無限に広がり、小さな草木や虫たちまでも生き生きと輝いていたように感じていた世界はもうありませんでした。私の子供時代は終わりました。

この事件以来、私は学校でも職場でも孤立し、人とのかかわりを避けるようになりました。時々発作的に涙がこぼれ、トイレに駆け込んで泣きました。異性はおろか同性の友達とさえまともにつきあえず、家では事件のフラッシュバックにおびえ、テレビもつけず、窓も雨戸を締め切ったまま、外出もしないという時期が何年も続きました。何度か自殺未遂もし、発見されました。

ある時、私は『愛と哀しみの果て』という映画を見ました。主人公が夫からうつされた梅毒に苦しみ、経営していたコーヒー農園が破産し、最愛の恋人が事故死した後、作家として自立していきます。原作を買って読むと、そこに、人生のさまざまな困難を苦しみぬいて生きてきた軌跡がいつか自分だけの人生の美しい絵となるといったことが書いてありました。同じころ、私はジャズ歌手ビリー・ホリディの歌に魅せられました。彼女は10歳の時にレイプされ、貧困の中で売春婦にまでなり、ジャズ歌手として有名になってからも人種差別や薬中毒で苦しみ、幸せではありませんでした。でも彼女の歌は多くの人の中にしみました。私は死ぬのをやめました。もしかすると「死にたい、死にたい」と思いながらも、私は無意識のうちに生きるよすがを探していたのかもしれない。

私は心の病で学校もやめていましたが、大学に行き直しました。また以前の私からは想像もつかないことですが、友達やボーイフレンドとつきあい、結婚もしました。

事件の真相はずっと誰にも言えませんでした。現在の夫も知りません。母にさえ、やっと5年前に言いました。調書をとる時、「犯人は顔を近づけてきた」としか言えませんでした。本当はレイプされていたのに、怖くて言えなかったのです。事件は「本当は公園で弟のおもりをしているはずなのに、知らない人に道を聞かれてつれていった」自分が悪いと思っていました。死ぬのをやめてから、私はだんだんと変わり、憤りを覚えてきました。そしてその憤りを5年前母にぶつけました。その時怒りは犯人よりも、父と母に向けられていました。事件後、犯人の妻が菓子折りをもって謝りにきたときにも、おだやかに応対し、丁寧な人だとまで言った母、その菓子折りを平然と出す母、「ご近所に恥ずかしい」といった母、私のことをわかろうとしなかった母。私はずっと母が憎かった。母は泣いていました。そして「ごめんね、ごめんね、知らなかったから」と謝っていました。どんなに謝っても、私の負ってきた重荷よりは軽い。両親のいうように、犯人を河原へ道案内した

私は馬鹿だったかもしれない。でも、私には罪はない。私は何も知らなかった。何も知らなかった子供に向けられた大人の刃 私は怒る気も失せ、許す気もなく、ただ母を冷ややかに見ていました。

あいりちゃんの事件から離れ、私のことばかりを書いてしまいました。ただ、被害者である私ができることといたら、あいりちゃんの事件の署名活動に参加する他に、被害者として、性犯罪がいかに私の人生を破壊してきたかを知っていただく以外ないと思ったのです。この手紙を書きながら、何度も具合が悪くなり、横になりながら休みました。フラッシュバックの身体症状は記憶が薄れていくのとは裏腹に、なぜか年々悪くなっていくように感じます。事件前に戻れない、何もなかった9歳の子供に戻れないと知った日から、私の人生には絶望しかありませんでした。ただ、その後たった一つ、息子という希望が私の人生に生まれました。母として、あいりちゃんのご両親のお気持ちを思うと、あいりちゃんにはなんとしてでも生きていてほしかったとお思いになられたのではないかと思います。ただ、被害者として、私の人生を振り返ると、あいりちゃんがもし生きていて私のような苦しみをずっと味わってしまうと考えると、いたたまれない気持ちになってしまいます。

あいりちゃんや私のような苦しみはもう誰にも味わってほしくありません。子供の人生を破壊した犯罪者が社会復帰して第二の人生を送れても、被害者には第二の人生はないのです。